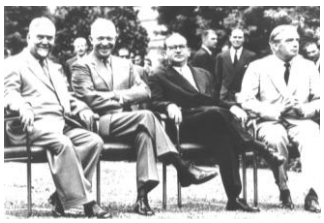
第 182 回　雪どけと第三世界

1　スターリンの死と平和共存

・1953 年、独裁者として君臨してきた（　　）した。
→ソ連は有力者による集団指導体制（トロイカ体制）に入った。
→徐々にフルシチョフによる指導体制が確立していった。

フルシチョフ
スターリンの死後、マレンコフやブルガーニンを抑えて最高権力者となった。

◆（　　）（第一書記在任 1953～1964 年）
・1955 年、ソ連・米・英・仏の首脳が（　　）を行った。
・1955 年、ユーゴスラヴィアと和解し、西ドイツと国交を結んだ。
・1956 年、（　　）で（　　）を行った。
→西側（資本主義諸国）との（　　）を打ち出した。
→さらに（　　）も行われた。
・1959 年、（　　）して、キャンプ=デーヴィッドでアイゼンハワー大統領と会談した。
※冷戦の対立が緩和されたことを、「　　」という。


左からブルガーニン（ソ）、アイゼンハワー（米）、フォール（仏）、イーデン（英）。
具体的な成果は無かったが、「雪どけ」を象徴する会談となった。
ジュネーヴ4巨頭会談

1957 年、ソ連が人工衛星の打ち上げに成功したことは、スプートニク=ショックと言われた。ソ連が大陸間弾道ミサイルの開発で優位に立っていることをはっきりと示した。
人工衛星スプートニク1号

アイゼンハワー（左）と談笑するフルシチョフ（右）。ソ連の最高指導者として初めて訪米した。ちなみに夫人と子供も一緒に行った。
フルシチョフ訪米

2　スターリン批判の衝撃

・フルシチョフによるスターリン批判は、東欧諸国に動揺を与えた。
・中国はスターリン批判と平和共存政策に反発し、（　　）が始まった。
→独自路線をとっていたアルバニアは中国を支持したため、ソ連と断交した。

・1956 年、（　　）西部の都市（　　）で、民衆が自由化や民主化を求める反政府反ソ暴動が発生した（ポズナニ暴動）。
→（　　）が強引にこれを収拾し、ソ連の介入を防いだ。

・1956 年、（　　）の首都ブダペストで、反ソ暴動が発生した。
→（　　）が首相となり、民主化などを約束した。
→しかしソ連軍がハンガリーに侵入し、暴動は鎮圧された。

元は工場の労働者。大戦中は、ポーランドで反ドイツ運動を行っていた。政敵の粛清などから、「小スターリン」と呼ばれた。
ポーランドのゴムウカ

暴動からソ連軍の介入までを、ハンガリー事件と言う場合がある。写真は破壊されたスターリン像や、社会主義のマークがくり抜かれたハンガリーの国旗。
ハンガリー反ソ暴動

ハンガリー事件の際に首相を務めたが、介入したソ連によって逮捕連行され、反逆罪を理由に絞首刑となった。なお姓がナジである。
ハンガリーのナジ=イムレ

3　第三世界の台頭

・米ソの冷戦が続くなかで、独立を果たしたアジアやアフリカの国々は、米ソのどちらにも属さない（　　）の形成をめざした。

・1954 年、（　　）で、アジア=アフリカ会議の開催が提唱された。
・1954 年、インドの（　　）首相と中国の（　　）首相が会談した。
→領土主権の相互尊重、内政不干渉、平和共存など（　　）を発表した。

・1955 年、インドネシアの（　　）で、（　　）が日本を含む 29 カ国が参加して開催された。
→（　　）が発表された。

周恩来とネルー

このころには良好な関係だったが、中国とインドは、1959 年以降チベットを巡って争うようになり、中印国境紛争へと発展した。現在でも未解決である。

平和十原則（1955年）　青字：五原則を継承

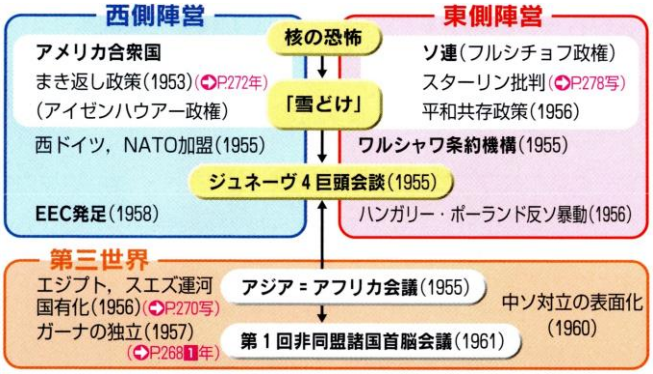
①基本的人権と国連憲章の尊重	②主権と領土保全の尊重（①）
③人類と国家間の平等（④）	④内政不干渉（③）
⑤単独・集団の自衛権尊重	⑥大国有利の集団的防衛排除
⑦武力侵略の否定（②）	⑧国際紛争の平和的解決（⑤）
⑨相互の利益・協力促進	⑩正義と国際義務の尊重

・1961 年、ユーゴスラヴィアの（　　）で、（　　）が開催された。
→アジア、アフリカ、ラテン=アメリカ諸国が参加し、結束を強めた。

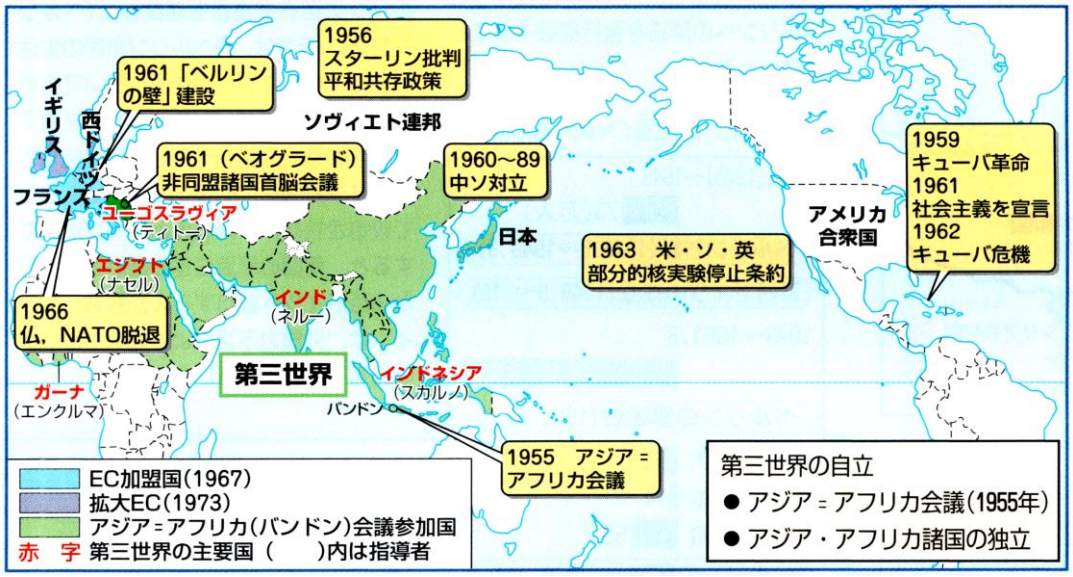
非同盟諸国首脳会議

左からネルー（インド）、エンクルマ（ガーナ）、ナセル（エジプト）、スカルノ（インドネシア）、ティトー（ユーゴスラヴィア）。この時代を代表するビッグネームばかりである。この写真で大問ひとつ作れる。

「雪どけ」の構図



Ⓑ 1955年頃～90年（第三世界の台頭・冷戦後期）



①冷戦の激化にともない，**「核」戦争の脅威**が世界に拡大
②ソ連の「平和共存」政策などにより大国間に協調ムードが高まり，**「雪どけ」の機運**が生まれる（米ソの軍拡は続く）
③アジア・アフリカ諸国を中心に，東西両陣営のいずれにも属さない**第三世界が形成**される
④**米ソの影響力低下**にともない，中ソ対立，英・仏・中の核保有，フランスの対米離反，欧州共同体の発展，西独・日本の成長，第三世界の結束強化などが進行